

授与が使役を表す時

バスク語の「*eman* コントロール構文」

石塚政行

noitartsinimda@gmail.com

キーワード： バスク語 授与動詞 コントロール 可能化 使役 意図

要旨

本稿ではバスク語の授与動詞 *eman* 「与える」と動名詞 V からなる「*eman* コントロール構文」について考察し、この構文の意味と文法について従来指摘されていなかった事実を提示する。*eman* コントロール構文では、*eman* の項と動名詞 V の非頭在的項との間に同一指示関係が成り立つ。先行研究では、[ERG ABS DAT V *eman*] という構造に対して、「DAT が ABS を V することを意図して、ERG が ABS を DAT に与える」という意味が想定され、*eman* の与格項 (DAT) と V の能格項、*eman* の絶対格項 (ABS) と V の絶対格項がそれぞれ同一指示であると考えられていた。

本稿で新たに示される内容は以下の3点である。①動名詞 V は3項動詞の場合があり、そのときには *eman* の能格項と V の能格項、*eman* の与格項と V の与格項、*eman* の絶対格項と V の絶対格項がそれぞれ同一指示になる。②V の表す事態の実現が含意されているかどうかという観点から見ると、*eman* コントロール構文の意味として少なくとも二つ、V の実現を含意しない「可能化」用法と、含意する「使役」用法を想定しなければならない。③可能化と使役の差は、V の実現を受取手がどれだけ意図的に制御できるかという点から生じている。このことは V が3項動詞になるパターンが可能かどうかにも影響を及ぼしている。

1. はじめに

バスク語の動詞 *eman* 「与える」は、本稿で「*eman* コントロール構文」と呼ぶ次のような構文を構成する。

- (1) *ama=k liburu=a eman dako haurr=a=ri lei-tze=rat*
母.SG=ERG 本=SG 与える.PFV PRS.TR 子供=SG=DAT 読む-GER=ALL
「母親は子供に本を与えて読ませてあげた」

この構文についての先行研究は多くない。辞書に記載がある他は、Artiagoitia (2003: 683f., 693) と de Rijk (2008: 401, 404) にそれぞれ短い記述が見られるのみである。de Rijk (2008: 404) によれば、この構文は *eman* とその能格項 X・絶対格項 Y・与格項 Z、および動名詞 V を成分とし、「Z が Y を V することを目的として、X が Y を Z に与える」という意味を表す。これに従

例えば、たとえば (1) は、「子供が本を読むことを目的として、母親が子供に本を与えた」となる。なお、動名詞 V の位置に現れることができるのは、飲食・知覚・認識動詞に限られている (ibid.)。本稿は、この *eman* コントロール構文について考察し、その文法と意味について新たな事実を提示することを目指す。

論文中で扱うデータはガラシ地方の低ナバラ・ラブル方言¹の話者から得たものである。*eman* コントロール構文に相当する構文は、細部は異なるものの、この方言を含む東部諸方言、およびビスカヤ方言で見られる (de Rijk 2008: 401, 404) が、以下では特に断りの無い限り東部諸方言のそれを指す。

2. *eman* コントロール構文の概要

バスク語はいわゆる自由語順の言語であり、節の基本的な構成要素の語順は情報構造によって決まる部分が多い。たとえば、焦点化された句や疑問詞を含む句は述語の直前に置かれる。ただし、頻度の高い語順は SOV である (de Rijk 1969)。

主節の述語は、多くの場合、分詞と助動詞から構成される。助動詞には、絶対格・能格・与格の項の人称と数が標示される。この標示は項名詞句が明示されているかどうかにかかわらず起り、一致機能と代名詞機能を兼ねる。

格は、名詞句の後に付く格助詞²によって標示される。格組織は、方言によって異なるが、おおむね能格型または活格型に分類できる (Aldai 2009)。無助詞で標示される S や O の格を絶対格、(e)k で標示される S や A の格を能格と呼ぶ。*eman* 「与える」のような 3 項動詞では、与え手が能格、授与対象が絶対格、受取手が与格 (*ri*) で標示される。

- (2) *ene aita=k ama=ri gona gorri=a eman dako*
 1SG.GEN 父.SG=ERG 母.SG=DAT スカート 赤い=SG 与える.PFV PRS.TR
 「私の父は母に赤いスカートを与えた」

eman コントロール構文の重要な文法的特徴は、そのコントロール構造である。ここで、コントロールとは、従属節の非頭在的項が上位節のいずれかの項と同一指示であると解釈される現象を指す³。従属節の非頭在的項の指示対象を決める上位節の項をコントローラーと呼ぶ。以下では、バスク語のコントロール構文と、その従属節の述語となる動名詞について紹介する。

バスク語が能格言語であることはよく知られているが、その能格性は形態的なものであり、

¹ 現在使われているバスク語諸方言は大きく 5 つに分けられる (Zuazo 2008)。低ナバラ・ラブル方言はその一つで、フランスの低ナバラ (Basse-Navarre) とラブルを中心に話されている。東部諸方言は、フランスバスクとスペインのナバラ州で話される諸方言を指す。ビスカヤは、スペインバスク州ビスカヤ県のことであり、ビスカヤ方言は同県および隣接するギプスコア県・アラバ県の一部でも話されている。ガラシ地方は、低ナバラのサンジャンピエドポールを中心とする地域である。主なコンサルタントはサンミシェル出身・在住の 1938 年生れの女性、Jeanne Ourthiague 氏である。例文 (27) は低ナファロアのレクンベリ出身の別の女性から得たデータである。

² ここで格助詞としている形態素は、「名詞句末の語の屈折接辞」と分析することもできる。

³ このような現象のうち、従属節の項と同一指示になる上位節の項が、上位節中で意味役割を与えられないものは、伝統的に「繰り上げ」と呼ばれるが、その区別については本稿では立ち入らない。

統語的にはむしろ対格性を示す現象が数多く指摘されている (Abaitua & Trask 1987, Ortiz de Urbina 1989, Trask 2002 など)。コントロール構文もその一つであり、従属節の主語 (すなわち S と A) が義務的に省略され、主節の主語や目的語と同一指示であると解釈される。たとえば (3, 4) では、動詞 *ari izan* 「～の最中である」の主語 (S) *Mañex* が、従属節の *ikuzten* 「体を洗う」の主語 (S) や *leitzen* 「読む」の主語 (A) のコントローラーとなっている。

- (3) *Mañex ikuz-te=n ari zen*
 マニェシュ 体を洗う-GER=INE 最中で PST.ある
 「マニェシュは体を洗っていた」

- (4) *Mañex liburu=a=ren lei-tze=n ari da*
 マニェシュ 本=SG=GEN 読む-GER=INE 最中で PRS.ある
 「マニェシュは本を読んでいる」

コントロール構文の従属節の述語動詞は、動名詞形を取る。動名詞は、接尾辞 *-tze/-te* で標示される。この接尾辞の交替は、形態音韻的条件による。動名詞を述語とする動名詞節は、内的には主節の述語とほぼ同様の項構造を保つが、外的には名詞句のように定冠詞 *a* や格助詞を伴う。たとえば、(5) の *egite(ak)* は、能格項 *aitak* や絶対格項 *etxe eder hori* を取ると同時に、それ自体、能格助詞 *k* で標示されている。一方、(4, 6) のように、動名詞の直接目的語 (P) は、属格にすることができる。

- (5) *aita=k etxe eder hori egi-te=a=k harri-tu nu*
 父.SG=ERG 家 美しい それ 作る-GER=SG=ERG 驚かす-PFV A1S.PRS.TR
 「父がその美しい家を作ったことに私は驚いた」

- (6) *aita=ren kale=an ikus-te=a=k harri-tu nu*
 父.SG=GEN 街=SG.INE 見る-GER=SG=ERG 驚かす-PFV A1S.PRS.TR
 「父をその街で見たことに私は驚いた」

コントロール構文の従属節となる動名詞には、内格助詞 *n* または向格助詞 *rat* が付く。どちらの格助詞が使われるかは主節の述語動詞のタイプによって決まる。たとえば、(3, 4) の動詞 *ari izan* の場合、動名詞 *ikuzten*, *leitzen* は内格 *n* で標示されている。

eman コントロール構文のコントロールは次のような特徴を持つ。まず、従属節の動名詞は、向格 *rat* で標示される (ビスカヤ方言では内格 *n* が用いられる [de Rijk 2008: 401])。 *eman* コントロール構文には後述するように二つのコントロールパターンがある。従来は、その一方しか記述されていなかった。de Rijk (2008: 404) は、従属節の主語 (能格項) のコントローラーは、主節の間接目的語 (与格項) である、と記述している。さらに、他のコントロール構文と異なり、*eman* コントロール構文では従属節の直接目的語 (絶対格項) も主節の直接目的語にコントロールされる。

たとえば (7 [=1]) と (8, 9) を比べてみよう。(7) は適格な *eman* コントロール構文である。動名詞 *leitzerat* 「読む」の項は明示されていないが、その主語は子供 (*eman* の与格項)、目的語は本 (*eman* の絶対格項) と解釈される。

- (7) *ama=k liburu=a eman dako haurr=a=ri lei-tze=rat*
 母.SG=ERG 本=SG 与える.PFV PRS.TR 子供=SG=DAT 読む-GER=ALL
 「母親は子供に本を与えて読ませてあげた」

一方、(8) で示すように、*eman* の目的語と *leitzerat* の目的語に別の名詞句が現れることはできない。また、(9) では *eman* と *leitzerat* の目的語の間に同一指示関係が成り立つことを意図しているが、*liburuaren* 「本」が属格で標示されていることから分かるように、動名詞 *leitzerat* の目的語だけが明示されているため、不適格となる。

- (8) **ama=k liburu=a lei-tze=rat lunet=ak eman dauzki-t*
 母.SG=ERG 本=SG 読む-GER=ALL 眼鏡=PL 与える.PFV PRS.TR-DIS
 「母はその本を読めるように私に眼鏡を渡してくれた」を意図

- (9) **ama=k liburu=a=ren lei-tze=rat eman dako haurr=a=ri*
 母.SG=ERG 本=SG=GEN 読む-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR 子供=SG=DAT
 「母親はその本を読めるように子供にそれを与えた」を意図

3. もう一つのコントロールパターン

1 節で触れたように、*eman* コントロール構文の動名詞 V として現れることが可能なのは、飲食・知覚・認識動詞に限られる。de Rijk (2008: 404) が挙げているのは *jan* 「食べる」・*edan* 「飲む」・*ikusi* 「見る」・*erakutsi* 「見せる」・*aditu* 「聞く」・*jakin* 「知る」・*ezagutu* 「知る」⁴である。筆者のコンサルタントは、これらに加えて *leitu* 「読む」・*ulertu* 「理解する」・*adiarazi* 「聞かせる」を容認したが、それでもごく限られた動詞だけが現れうることには変わりがない。

これらの動詞のうち、注目されるのは *erakutsi* 「見せる」や *adiarazi* 「聞かせる」といった 3 項動詞である。de Rijk (2008: 404) の意味記述に厳密に従うならば、*erakusterat eman* の意味は、「Z が Y を (誰かに) 見せることを意図して、X が Y を Z に与える」になるはずである。しかし、実際には *erakusterat eman* は *ikusi* 「見る」を V とする *ikusterat eman* とほぼ同様の意味を表す。たとえば、(10, 11) ではいずれの場合も「女性が写真を見る」ことを意図して授与が行なわれている。「女性が写真を誰かに見せること」が意図されているわけではない。

- (10) *Peio=k andre=a=ri potret=a eman dako ikus-te=rat*
 ペイオ=ERG 女性=SG=DAT 写真=SG 与える.PFV PRS.TR 見る-GER=ALL
 「ペイオは女性に写真を与えて見せた」

⁴ *jakin* は典型的には補文を取り、*ezagutu* は名詞句を取る。

- (11) *Peio=k andre=a=ri potret=a eman dako erakus-te=rat*
 ペイオ=ERG 女性=SG=DAT 写真=SG 与える.PFV PRS.TR 見せる-GER=ALL
 「ペイオは女性に写真を与えて見せた」

従って、V が *erakutsi* 「見せる」のような3項動詞の場合のコントロールパターンは、de Rijk が記述する通常の場合とは異なるということになる。二つのコントロールパターンは次表のようにまとめられる。

表 1. 二つのコントロールパターン

	Vの主語	Vの直接目的語	Vの間接目的語
通常のコントロール	<i>eman</i> の間接目的語 Z	<i>eman</i> の直接目的語 Y	なし
3項動詞のコントロール	<i>eman</i> の主語 X	<i>eman</i> の直接目的語 Y	<i>eman</i> の間接目的語 Z

これをもとに de Rijk の意味記述を修正すると、*erakutsi* の場合は「X が Y を Z に見せることを意図して、X が Y を Z に与える」となる。このコントロールパターンは、*erakutsi* のように V が X・Y・Z の三つを項とする場合に見られるので、以下では3項パターンと呼ぶ。

3項パターンは、筆者のコンサルタントからは *erakutsi* 「見せる」と *adiarazi* 「聞かせる」しか得られなかったが、Elhuyar Web コーパスのデータからは、これら以外にも多く見付かった。これをまとめたのが表 2 である。

Elhuyar ウェブコーパスは、ウェブ上の文書から構築された 1 億 2462 万 5420 語のコーパスである。正書法上の語ごとに品詞タグ付けがされている。表 2 のデータは次のようにして得られた。語彙素 EMAN (動詞) の直前に、*tzera* または *tera* で終わる動詞の語形 (向格動名詞の標準語形) が来る場合を検索し、両者の間に句読点が現れるものを除いた。ウェブ上の文書では標準語がもっとも普通に用いられているので、検索では標準語形を用いている。向格動名詞節は *eman* の直前に来るとは限らないので、このデータはコーパス中の全ての *eman* コントロール構文を抽出してはいないが、大まかな傾向は見ることができる。検索したのは 2015 年 10 月 2 日である。

太字にしたものが3項パターンの動詞である。そのなかでは *erakutsi* 「見せる」と *adiarazi* 「聞かせる」(*adiarazi* の標準語形) が多く、筆者の調査結果とも合致する。その他、表中にある動詞では *agertu* 「見せる」と *ezagutarazi* 「知らせる」が3項パターンを示す。また、*jakin* 「知る」に対応する *jakinarazi* 「知らせる」が1件あった。

興味深いのは、3項パターンを示す飲食動詞は1件も現れていないということである。知覚動詞 (*erakutsi* 「見せる」) や認識動詞 (*ezagutarazi* 「知らせる」) には3項パターンがあるのに、飲食動詞にはない。これはなぜだろうか。この問いに答えるためには、*eman* コントロール構文の意味をさらに詳しく考察する必要がある。

表 2. Elhuyar Web コーパスにおける *eman* コントロール構文の動名詞の種類

動詞	意味		動詞	意味	
aditu	聞く、聞き知る	3351	ezagutarazi	知らせる	18
ezagutu	見知る	2839	dastatu	味見する	11
jakin	知る	802	irakurri	読む	11
erakutsi	見せる、示す	109	izan	である	9
adierazi	聞かせる、知らせる	44	entzun	聞く	9
edan	飲む	27	egin	する	8
agertu	見せる、示す	26	probatu	試す	6
ulertu	理解する	25	aitu	聞く	5
jan	食べる	24	pentsatu	考える	5
ikusi	見る	21	その他		114
			計		7464

4. *eman* コントロール構文の二つの意味

再び de Rijk (2008: 404) の意味記述を出発点にして、*eman* コントロール構文の意味を考えてみよう。彼の定式化は、「Z が Y を (あるいは、上の修正を加えれば、X が Y を Z に) V することを意図して、X が Y を Z に与える」であった。この記述からは、V の実現は含意されていないように読める。一方で、de Rijk は *eman* コントロール構文は一種の使役文であるとも述べている (ibid.)。この言い方からは V の実現が含意されているかのようにも感じられる。果たして、この構文における動名詞 V の表す事態は、実現が含意されているのだろうか。結論から言えば、*eman* コントロール構文には V の実現を含意する用法としない用法がある。

4.1 可能化用法

まず、V の実現が含意されない例を見てみよう。(12) では接続詞 *bainan* 「しかし」によって二つの節が接続されている。一つ目の節が *eman* コントロール構文であり、V の表す事態は「ピンチョが骨を食べる」である（「ピンチョ」はバスク地方によくある犬の名前である）。二つ目の節ではそれが否定されているが、まったく問題なく容認される。つまり、二つの節は矛盾しないということであるから、この用例においては V の実現は含意されていないと結論できる。(13) も同様である。ただし、含意 (entailment) はないが、明確に否定されなければ V の実現の推意 (implicature) はあることに注意しなければならない。

- (12) *Pintto=ri hezurr=ak ja-te=rat eman dazko-t*
 ピンチョ=DAT 骨=PL 食べる-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR-EIS
bainan ez tu jan
 しかし NEG A3P.PRS.TR.E3S 食べる.PFV
 「ピンチョに骨を与えて食べられるようにしたが、食べなかった」

- (13) *ama=k haurr=a=ri liburu bat eman dako lei-tze=rat*
 母.SG=ERG 子=SG=DAT 本 IDEF.SG 与える.PFV PRS.TR 読む-GER=ALL
bainan ez du lei-tu
 しかし NEG A3S.PRS.TR.E3S 読む-PFV

「母親は子供に本を与えて読めるようにしたが、子供は読まなかった」

上に示したような、Vの実現が含意されない例に関して注目すべき点は二つある。一つは、どの例においても具体物の授与が実現しているということ、もう一つは、Vの意味クラスは飲食と知覚に限られる（認識動詞は入らない）ということである。順番に検討していこう。

de Rijk (2008: 404) の記述の通り、(12) や (13) の例においては具体物の授与が実現している。(12) では発話者の手からピンチョの元へ骨が移動し、(13) では母親から子供のもとへ本が移動している。結果として、ピンチョが骨を食べたり、子供が本を読んだりすることが可能になったが、彼らはそれを実行しなかった、というわけである。これは、Newman (1996:171, 181ff.) が「可能化」(enablement) として分類している意味拡張の例と言える。

簡単に言えば、可能化とは何らかの事象の実現を可能にすることである (Newman 1996: 171)。使役的状况には結果事象の実現が含まれているが、可能化的状况においては結果事象は潜在的にしか存在せず、その実現は不問に付されている。たとえば、馬小屋にいる馬に牧草を与えることを考えてみよう。飼葉桶に牧草を入れれば、馬はその牧草を喜んで食べる。馬が牧草を食べた場合、「馬が牧草を食べる」ことを結果事象とする使役的状况として、この出来事を捉えることができる。一方、中には、調子でも悪いのか、口をつけようとしぬ馬もいるかもしれない。馬が牧草を食べるか食べないかは馬次第であり、牧草を与えることは単にそれを可能にするに過ぎないと考えれば、馬が実際に牧草を食べるにせよ食べないにせよ、それを可能化的状况として捉えることもできる。

なぜ授与動詞が可能化を表すことができるのだろうか。馬と牧草の例にも見られるように、典型的な授与では、しばしば、授与が完了した後、受取手は授与対象に対して何らかの行為をする (Newman 1996: 53f., 185)。たとえば、就寝前の読書を習慣としている客人の太郎に小説を与える場合を考えてみよう。このような授与が成立するときには、与え手も受取手の太郎も授与の完了後に太郎がその本を読むことを期待しているし、太郎がその小説を気に入れば彼は実際にその本を読むだろう。ここで期待されている行為は、授与によって授与対象が受取手の管理下に入ることで可能になる行為、と捉えることができる。太郎に小説を与えることは、一面では太郎が小説を読めるようにするということでもある。このように、典型的な授与行為には、受取手に対して何らかの行為を可能にする行為という側面が認められるのである。

ところで、上述した太郎と本の例における授与事象は、単に、*I gave him a book* と表現することもできる。この場合、授与の完了後に受取手が授与対象に対してすることが期待されている、授与によって可能になる行為（その本を読むこと）は明示されていない。一方で、この行為を明示的に不定詞で表現し、*I gave him a book to read* と言うこともできる。このような構文は他の言語にも見られる。

(14) *Ich gab ihm eine Tasse Tee (zu trinken).*

I gave him.DAT a cup.ACC tea to drink.INF

‘I gave him a cup of tea (to drink).’ (ドイツ語、Newman 1996: 186)

(15) 他 給 我 東西 (吃)

he gave me thing eat

‘He gave me something (to eat).’ (官話、Newman 1996: 186)

これらの構文で重要なのは、バスク語の(12)や(13)の例と同様に、具体物の授与が意味に含まれているということである。一方、具体物の授与の意味が無くなり、一般的な可能化の意味を持つようになった授与動詞の例もある。

(16) *emu ne dali govorit’*

him.DAT NEG gave.PL speak.INF

‘They didn’t let him speak.’ (ロシア語、Newman 1996: 188)

(17) 我 要 看, 他 就 给 我 看

I want look he then give me look

‘If I want to look, he will let me.’ (官話、Newman 1996: 189)

eman コントロール構文はどちらの意味を表すのだろうか。(12-15)の例のように、具体物の授与に関わる可能化のみを表すのか、それとも、(16, 17)のように、授与がある場合に限らず一般に何かを可能にすることを表せるのか。その答えは、次の例から明らかである。

(18) *Pintto=ri hezurr=ak eman dazko-t bainan*

ピンチヨ=DAT 骨=PL 与える.PFV PRS.TR-EIS しかし

*ez tu-t ja-te=rat {*eman/utz-i} bost minutu=z*

NEG A3P.PRS.TR-EIS 食べる-GER=ALL { 与える.PFV/PERM-PFV } 五 分=INS

「私はピンチヨに骨を与えたが、5分間食べさせなかった」

(18)は二つの節からなる。一つ目の節では発話者がピンチヨに骨を与えたことが述べられている。しかし、「おあずけ」をさせるなどして、発話者はピンチヨがその骨を食べることを5分の間許さなかった、ということが二つ目の節で意図されている内容である。このとき、二つ目の節で許容使役の動詞 *utzi* を使うことはできるが、*eman* コントロール構文は容認されない。これは、この構文が「授与によってVの実現を可能にする」という意味を表すために、「すでに与えている骨を再び与える」という不自然な状況が想定されてしまうからだと考えられる。従って、*eman* コントロール構文は一般的可能化の用法は持たないと結論できる。

また、このように考えることによって、次のような例の不適合性も説明できる。

- (19) **zintzurr=a ikus-te=rat eman dako-t mediku=a=ri*
 のど=SG 見る-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR-E1S 医者=SG=DAT
 「私は医者にのどを見せた」を意図

- (20) **mendi=ak eman-en dauzki-tzu-t ikus-te=rat*
 山=PL 与える-FUT PRS.TR-D2S-E1S 見る-GER=ALL
 「私はあなたに山を見せる」を意図

(19)における「のど」はそもそも授与の対象にはならない。(20)における「山」は授与の対象にはなりうるかもしれないが、通常その授与があろうとなかろうと見ることは可能であろう。従って、「授与による可能化」という *eman* コントロール構文の意味とは適合しない⁵。

一方、このような一般化から少し外れる例も存在する。(21)の「寝室」は、話し手が経営するホテルの寝室であるので、聞き手がそれを見るためには話し手に案内してもらったり鍵を開けてもらったりしなければならない。このような行為が(21)における「授与」として解釈できることが、適格性の理由として考えられる。しかし、(22)のような *eman* の単独使用と比べてみるとどうだろう。(22)では、聞き手がその寝室を自らの部屋として使用する権利が生じる。このような権利は(21)で述べられている「授与」によっては発生しない。従って、少なくとも(21)の *eman* コントロール構文における「授与」と、*eman* が単独で表す授与は異なるということになる。

- (21) *ganber=a eman-en dau-tzu-t ikus-te=rat*
 寝室=SG 与える-FUT PRS.TR-D2S-E1S 見る-GER=ALL
 「私はあなたに寝室を見せる」

- (22) *ganber=a eman-en dau-tzu-t*
 寝室=SG 与える-FUT PRS.TR-D2S-E1S
 「私はあなたに寝室を与える」

ここまでは、可能化用法では具体物の授与が意味に含まれることを示した。この授与は、*eman* が単独で表すことの出来る授与の場合もあるし、そうでない場合もある。しかし、*eman* の主語が所有する譲渡可能な具体物が *eman* の直接目的語になっており、そのステータスが変化するという点は共通している。次に、認識動詞 *ezagutu* 「知る」では V の実現は必ず含意されることを簡単に確認しよう。

⁵ このような制約は北京語の授与動詞「給」のある種の用法にも見られる(木村・楊 2008)。

(a) *小红 给 小王 看 富士山
 シャオホン PREP 王君 見る 富士山
 「シャオホンは王君に富士山を見させようとした」を意図(北京語、木村・楊 2008)

- (23) **liburu=a ezagu-tze=rat eman dako-t bainan ez du ezagu-tzen*
 本=SG 知る-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR.D3S-E1S しかし NEG PRS.TR 知る-IPFV
 「私は彼にその本を与えて教えてあげたが、彼はその本のことを知らない」を意図

例 (23) は、一つ目の *eman* コントロール構文の節と、その V (*ezagutzerat* 「知る」) の実現を否定する二つ目の節から構成されているが、矛盾が生じるため容認されない。つまり、具体物 (この場合は「本」) の授与があっても、V が認識動詞ならば、その実現は含意されるのである。

以上の考察をまとめると、*eman* コントロール構文の可能化用法、すなわち V の表す事態の実現が含意されない用法は、「具体物の授与によって V の実現を可能にする」という意味を表すこと、認識動詞 *ezagutu* 「知る」が V の場合には可能化用法にはならないことが分かった。

4.2 使役用法

次に、V の実現が含意される、すなわち、V の使役が表される用法を見よう。

- (24) **ezagu-tze=rat anai=a=ri ene adiskide=a eman dako-t*
 知る-GER=ALL 兄-SG=DAT 1SG.GEN 友人=SG 与える.PFV PRS.TR-E1S

bainan ez du ezgu-tzen
 しかし NEG A3S.PRS.TR.E3S 知る-IPFV
 「私は友人と兄を知り合いにしようとしたが、彼らは知り合いではない」を意図

この例の一つ目の節では、*ezagutzerat* 「知る」を V とする *eman* コントロール構文が用いられている。二つ目の節で V の実現 (兄が友人と知り合いになること) が否定すると、容認されなくなる。従って、この例は V の実現を含意する使役用法だということになる。

可能化用法では具体物の授与が必ず含意された。それに対して、使役用法では具体物の授与が成立する必要はない。このことは、たとえば (24) の *eman* コントロール構文から V を取り除いた (25) のような例が容認されないことから分かる。

- (25) **anai=a=ri ene adiskide=a eman dako-t*
 兄-SG=DAT 1SG.GEN 友人=SG 与える.PFV PRS.TR-E1S
 「私は友人に兄を引き合わせた」を意図

(24, 25) の対比が示しているのは、(24) の *eman* の直接目的語 *adiskidea* 「友人」は、*eman* が単独で認可できるものではないということである。(24) の *adiskidea* 「友人」は、*ezagutu* 「知る」の直接目的語であることを介して認可されている。これは、(24) の *eman* がもはや単独の授与用法から大きく離れた意味を表しているということでもある。このような現象は次の *jakin* 「知る」を V とする *eman* コントロール構文にも見られる。この例では、*eman* はもはや直接目的語をとっておらず、代わりに補文節が現れている。

- (26) *auzapez=a=k jaki-te=rat eman du zubi=a aurten egin-en de-la*
 市長=SG=ERG 知る-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR 橋-SG 今年 作る-FUT PRS.INTR-COMP
 「市長はその橋が今年作られることを（人々に）知らせた」

使役用法の *eman* コントロール構文は、構文全体としては何らかの「情報の授与」を表す。可能化用法では、「具体物の授与によってVの実現を可能にする」という意味が表されていた。それに対して、使役の場合は「Vを実現させる」ことがそのまま「情報の授与」になっている。たとえば、(24, 25) の兄と友人を知り合わせる例では、友人（の存在という情報）を知らなかった兄が、それを知るという変化がある。市長が橋について知らせる (26) の例では、橋が今年作られることを知らなかった人々がそれを知るようになる。

また、見ることは視覚情報を「受け取る」ことであるとも言える。具体物の授与を伴わず、視覚情報の受け取りに焦点がおかれている場合、*ikus* 「見る」をVとする *eman* コントロール構文は「見せる」という使役を表す。

- (27) *film horr=ek gauza frango eman dau-t ikus-te=rat*
 映画 それ=ERG こと たくさん 与える.PFV PRS.TR-EIS 見る-GER=ALL
 「その映画はたくさんのことを見せてくれた」

授与後も授与対象は与え手の元にあり続けるという点が具体物の授与と異なるが、このような状況には具体物の授与と十分な共通性がある (Newman 1996: 188)。情報の出所が授与者、情報が授与対象であり、その情報には受取手が存在する。さらに、受取手の知識の変化は、授与対象が受取手の元に移動することに対応する。

情報の授与は、具体物の授与と同時に起きることもある、という点は注目すべきである。前節で、具体物の授与があっても、Vが *ezagutu* 「知る」の場合はその実現が含意されるということを見た。たとえば次のような例である。

- (28) *liburu=a ezagu-tze=rat eman dako-t Peio=ri*
 本=SG 知る-GER=ALL 与える.PFV PRS.TR-EIS ペイオ=DAT
 「私はペイオにその本を与えて教えてあげた」

この例では、具体物「本」が話し手からペイオの元に移動するとともに、その本の存在をペイオが知るという変化も起きている。すなわち、具体物の授与と情報の授与が同時に存在しているわけである。このような例は、可能化用法と使役用法、同時に両者の事例となっている。

5. まとめと考察

以上の観察から *eman* コントロール構文の文法と意味は次のようにまとめることができる。まず、文法面について言うと、この構文のコントロール構造には二つのパターンを認めることができる。第1のパターンは以前から指摘されていたものであり、Vの主語が *eman* の間接目

的語に、Vの直接目的語が *eman* の直接目的語にコントロールされる。この場合、Vは2項動詞である。第2のパターンは、Vの主語・直接目的語・間接目的語が、それぞれ *eman* の主語・直接目的語・間接目的語と同一指示になるものである。こちらでは、Vは3項動詞になる。

さらに、*eman* コントロール構文の意味としては、Vの表す事態の実現が含意されるかどうかという観点から、次の二つに分けられる。一つは「具体物の授与によってVの実現を可能にする」可能化用法、もう一つは「情報の授与によってVを実現させる」使役用法である。

「具体物の授与による可能化」と「情報の授与による使役」を分けるのは、第一に具体物の授与の有無であり、第二にVが認識動詞であるかどうか、であった。可能化が表されるためには、具体物の授与がなければならず、Vは飲食動詞や知覚動詞でなければならなかった。Vに関するこのような制限は何を意味しているのだろうか。

飲食は、飲食物を与えるだけでは成立せず、飲食物の受取手の飲食しようとする意図が必要である。つまり、飲食物の授与によって飲食を可能にしても、その飲食が実現するかどうかはひとえに受取手にかかっている。これは「読む」についてもほぼ同様に当てはまる。何か文字媒体を受け取っても、それを読もうとしない受取手がそれを読むということはありません。従って、具体物の授与によって可能になる行為が飲食や「読む」である場合、その実現はひとえに受取手の意図によるために、実現は含意されないのである。

具体物を受け取ってそれを「見る」場合には、微妙である。知覚は生き物の本質的な性向であって、刺激を受け取っただけで意図せず成立してしまうものと捉えることは自然である。しかし、具体物を受け取る場合であれば、目を塞いだり逸らしたりすることで受け取ったものを見ないこともできる。実際、(29)のように、具体物の授与によってそれを見ることが可能になったという状況を表す場合には、実際に見るかどうかには受取手の裁量が利くため、Vの実現の推意を取り消すことができる。

- (29) *Peio=k andre=a=ri hilotz=a=n potret=a eman dako ikus-te=rat,*
 ペイオ=ERG 女性=SG=DAT 死体=SG=GEN 写真=SG 与える.PFV PRS.TR 見る-GER=ALL
bainan ez du har=i behatu-ko
 しかし NEG A3S.PRS.TR.E3S それ=DAT 見る-FUT
 「ペイオは女性に死体の写真を見せようとしたが、彼女は見なかった」

一方で、具体物を受け取ってその存在を認識しないということはほとんど不可能である。このために、*ezagutu* 「知る」をVとする *eman* コントロール構文は、具体物の授与がある場合でもVの実現は含意されるということになる。

この考察から、3節の最後で提起した問いにも答えることができる。コントロールの3項パターンを示す知覚動詞 (*erakutsi* 「見せる」) や認識動詞 (*ezagutarazi* 「知らせる」) は例があるのに、飲食動詞は現れないのはなぜなのか。それは、知覚や認識は具体物を受け取ることで、受取手の意図にかかわらず成立するという捉え方が可能なのに対し、飲食にはそのような解釈

の余地がないからである。仮に *janarazi* 「食べさせる」や *edanarazi* 「飲ませる」といった3項動詞を *eman* コントロール構文で使ったとしよう。重要なのは、これらの動詞は真正使役を表し、許容使役の意味では使えないと言う点である。これらの動詞の直接目的語は食べ物や飲み物などの具体物であるから、*eman* コントロール構文で用いれば「具体物の授与によってVを可能にする」という意味が表現されることになる。ここでは、受け取った飲食物を食べたり飲んだりすることは、受取手にその意図がある場合にのみ起こると捉えられている。それに対して、*janarazi* 「食べさせる」や *edanarazi* 「飲ませる」は真正使役であり、被使役者 (= 受取手) の意図にかかわらず使役者 (= 与え手) の力で飲食を実現させる、ということが表されている。このために、意味のミスマッチが生じるのである。

本稿の主張は次のようにまとめられる。*eman* コントロール構文は「具体物の授与による可能化」と「情報の授与による使役」を表す。具体物の授与が関わる場面では、受取手が授与対象に対して動名詞Vの表す行為をどれだけ意図的にできるかによって、可能化と使役の解釈が変わる。このことは、3項パターンのコントロールが見られるかどうかをも左右している。

略号

略号はおおむね Leipzig Glossing Rules に従った。定動詞の人称標示は、対応する項名詞句が明示されていない時に限り、項の格、人称、数をそれぞれ1文字で以下の通り示した。格：A = 絶対格、E = 能格、D = 与格。人称：1-3 = 一～三人称。数：S = 単数、P = 複数。その他、PERM = 許容使役、PREP = 前置詞の略である。

参考文献

- 木村英樹・楊凱栄 (2008) 「授与と受動の構文ネットワーク：中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一 (編) 『ヴォイスの対照研究：東アジア諸語からの視点』65-91. くろしお出版。
- Abaitua, Joseba & Trask, R. L. (1987) Accusativity in Basque: Reply to Bossong. *Linguistics* 25: 395-401.
- Aldai, Gontzal (2009) Is Basque morphologically ergative?: Western Basque vs. Eastern Basque. *Studies in Language* 33: 783-831.
- Arriagoitia, Xabier (2003) Complementation (noun clauses). In: Hualde, José Igancio & Ortiz de Urbina, Jon (eds.) *A grammar of Basque*, 634-710. Berlin: Mouton de Gruyter.
- de Rijk, Rudolf P. G. (1969) Is Basque an S. O. V. language? *Fontes Linguae Vasconum* 3: 319-351.
- de Rijk, Rudolf P. G. (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Newman, John (1996) *Give: A cognitive linguistic study*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Ortiz de Urbina, Jon. (1989) *Parameters in the grammar of Basque*. Dordrecht: Foris.
- Trask, R. L. (2002) Ergativity and accusativity in Basque. In: Davidse, Kristin & Lamiroy, Béatrice (eds.), *The nominative-accusative and their counterparts*, 265-284. Amsterdam: John Benjamin.
- Zuazo, Koldo (2008) *Euskalkiak: Euskararen dialektoak*. Donostia: Elkar.

When Giving Means Causing: The Control Construction with *eman* in Basque

ISHIZUKA Masayuki
noitartsinimda@gmail.com

Keywords: Basque, verb of *giving*, enablement, causation, volition

Abstract

This paper deals with a control construction in Basque, which consists of the verb *eman* ‘give’ and a gerund V subordinated to it. The subject of V is controlled by *eman*’s indirect object (recipient) and the direct object of V by *eman*’s direct object (theme). I will offer a new account of the control pattern and the meaning characteristic of this construction.

When the gerund (V) is trivalent, the construction shows another control pattern: each of V’s three arguments bears the same grammatical relation as that of *eman*’s argument which controls it. The construction has two types of meaning, depending on whether or not the process denoted by V actually occurs. When the use of the construction does not entail the realization of the process, it means “enablement” of the process by giving the recipient (i.e. the subject of V) tangible objects. On the other hand, if the realization is entailed, the meaning of the construction can be described as “causation” of the process by giving the recipient some information. This contrast comes from the difference in the extent to which the recipient can perform the process of his/her own volition. This also affects the probability of trivalent predicates occurring in the V position.

(いしづか・まさゆき 東京大学)